

宮野山の露頭

呉羽山礫層（くさり礫）

宮野山運動公園から仏舎利塔へ向かう道路の東側に、「名水の里」の大看板があります。この看板脇を通る遊歩道沿いには、右の写真のような「くさり礫」と呼ばれる石がたくさんあります。



「くさり礫」は、造岩鉱物（長石、黒雲母など）から、ClやSi、Na、Mg、Ca、K等が化学的風化作用によって水に溶け出してもろくなったものです。溶け出した元素は雨水といっしょに海へ流れ込みました。現在の海水成分の一部は、礫の中の鉱物が起源なのです。（NaClやMgCl₂など）

長石では化学的風化作用を受け「カオリナイト」と呼ばれる白色粘土物質に変化していきます。カオリナイトは、磁器用粘土として使われる他、紙の漂白や女性用の化粧品などにも用いられています。

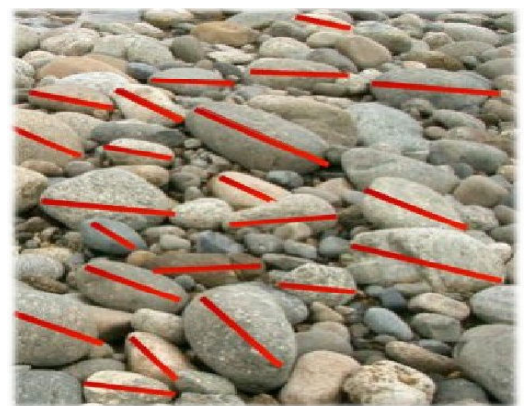


風化礫（くさり礫）

このくさり礫は、西は南砺市から東は朝日町まで富山県内の旧扇状地で広く見ることができます。

礫の覆瓦構造

水流によって礫が運ばれる際、長軸方向（石の長い方向）が流れと垂直になると、一番効率よく転がることができます。川原の礫は水流によって転がされながら運ばれてきたため、下の写真のように向きをそろえています。



また、礫が堆積する時には、水の抵抗が一番弱くなり安定するよう並びます。川原の石は、皿に並べた刺身のように下流側の石にもたれかかった状態になっています。自然現象はこのように非常に理にかなっています。事象を見る時に、「なぜこうなるのか」と考えてみるといいですね。

礫の並び方のきまりは、露頭の中の礫にも当てはまります。露頭に見える礫の並び方から、昔の川の
流れなどを推測することができます。



旧扇状地面

宮野山から目を東に転ずると、舟見野台地を展望することができます。今は黒部川をはさんで離れ離れ
になっている台地は、実は一続きの扇状地だったのです。

一番最初に黒部川が棚山台地と十二貫野台地とをつなぐ面に
扇状地①を形成しました。扇頂は現在よりずっと上流側でし
た。次に、この扇状地面①が隆起したため、扇状地面①が浸食
を受けるとともに舟見野台地と前沢をつなぐ面に扇状地②を形
成しました。さらに、土地の隆起に伴う黒部川の浸食作用によ
って、扇状地②が浸食を受け現在の扇状地面③が形成されてい
きました。実際には3回以上土地が隆起し、斜度の異なる扇状
地面がいくつも形成されています。国道8号線から山の方向を見ると、十二貫野台地上部に傾斜の少し
急な部分があるで、ここにも扇状地面があったことが分かります。黒部川扇状地では、このような隆起
と浸食を何回か経て、現在の地形が形成されました。



宮野山の遊歩道は、土地の隆起を実感できる場所なので、「大地のつくり」の学習にぜひ取り入れた
い場所です。

